

ライフストーリー分析のための想像力
— 社会学的想像力と文学的想像力のあわいを縫う —

横 田 恵 子

Considering the Process of Life Story Analysis:
The Possibility of Combining Sociological and Literary Imagination

YOKOTA Keiko

要 旨

社会学的調査の一手法であるライフストーリー・インタビュー法は、インタビュアーとインタビューの相互作用を重視する。本稿は、対話的構築主義の立場から編まれたテキスト集（「医師の語り（2009）」）を二次分析する別稿に先立って用意された論考であり、インタビューテキストの二次分析の前に考慮すべき点を論じたものである。第一に、社会学的研究テーマとして「医師の語り」が重要であることを示しつつ、分析対象の聴き取り調査で対話的構築主義が採用されたことを反省的に検討する。次に、社会学的インタビューを記録する際に、現在多く採用されている準科学的な手続きが抱える限界について考える。「記述スタイル」に他の方法・可能性があると考えるなら、その解決策の一つとして「エクリチュール・フェミニン」が採用可能なのではないか、という検討を行う。最後に、“誰が経験を語る資格があるのか”という当事者性の問題と、災禍記憶の継承の関係について考える。「個人的な記憶と過去の集合的な記憶の関係」は、集合的記憶論が再び参照される現在、ライフストーリー読解の分析軸としても重要な二つ目の補助線となるだろう。

キーワード：ライフストーリー法、対話的構築主義、エクリチュール・フェミニン、「医師の語り」、記憶の継承

Abstract

The life story interview method, a research tool in Sociology studies, emphasizes the interaction between the interviewer and interviewee. This paper discusses points that need to be considered beforehand when conducting a secondary analysis of “the narratives of doctors involved in the treatment of HIV infection,” through dialogical constructivism. The first point intends to prove that, as a sociological research theme, medical doctors’ narratives are variable. The second point raises the issue that the current method of écriture, which describes the interview results, is problematic. Here, the author examines the possibility of using “écriture feminine” as one of the solutions. Finally, the paper discusses, “who is qualified to talk about experiences?” and “the relationship between personal memories and collective memories of the past.” These issues, which are based on the theory of collective memory, must be understood as the axis of analysis when analyzing the interviews. (This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 18K02055.)

Keywords: Life story interview, dialogical constructivism, écriture feminine, “doctor’s narrative,” inheritance of memory

1. はじめに

かれんには話したくても話せないことがあった。話されても書けないことがインタビューにはあった。だれかが隠している経歴を暴いてしまわないように、だれかを怒らせて刃物を振りまわさせないように、だれかの玩具おもちゃにされて涙を流すことのないように、たがいに均衡を探った。かれんが「オフレコで」と言うとき、それは決して書いてはならないと抑止するブレーキだった。インタビュアーが「オフレコで」と言われるとき、それは工夫を凝らして書いてみると挑発されるアクセルだった。

(五所純子, 2021「薬を食う女たち」p. 18.)

1.1. 対話的構築主義に連なる「社会学的聴き取り」の系譜とその一実践

昨今の社会的な調査計画は、その多くに「インタビュー」や「聴き取り」手続きを含む。大学の社会学（福祉学を含む）や心理学領域でも、必ず質的調査に関する授業があり、卒業論文・修士論文レベルで「聴き取り」を企画する学生も少なくない。

この傾向を、日本の近代社会調査史の流れに沿って教科書的に整理するなら、大きくは中野卓に始まるオーラルライフヒストリー研究に連なる系譜となろう。中でも桜井厚（2002）が対話的構築主義と位置づけ、実践して来たライフストーリー研究は、桜井に親炙する研究者グループを中心に、社会的な参与観察・インタビュー実践の一つのスタイルとして広まっていった。その後、主張の根幹を成す対話的構築主義¹⁾が、「聴き手と語り手のいま・ここでの相互行為性の重視」「あらかじめ問題は定立しかねる」という姿勢によって現実のフィールドワークが持つ暴力性や政治性を回避する状況を生むのではないか——それによって人々の経験のリアリティが描ききれなくなっているのではないか、という問い直し、岸政彦（2015）らから示されるようになった。

本稿は、次に稿を起こす「テキスト『医師の語り（2009）』を繙く：薬害 HIV 治療に関わった医師たちへの社会的インタビューが創造／想像するもの（仮）」のために、それに繋がる序論として位置づけるものである。次稿では、HIV 感染症、特に薬害由来の患者の治療に関わった臨床医たちの語りを集積したテキスト「医師の語り（2009）」²⁾の批判的読解・分析を予定しているが、その前に本稿で、「なぜ医師の語りが社会的な研究対象として意味を持つのか」「聴き取りに臨んだ社会学者たちは、なぜライフストーリーの手法で医師と向き合ったのか」「その結果、一次テキストの集積としての刊行物はどのようなコンテンツとなったのか」

1) この概念は、桜井自身の造語である。

2) この著作物は、2002～2005年度科研費による研究「輸入血液製剤による HIV 感染被害問題の社会的な研究—医師への聞き取り調査を中心に（基盤研究（B）・研究代表者：栗岡幹英）」の研究成果を基に、2009年に特定非営利活動法人 ネットワーク医療と人権から「医師と患者のライフストーリー・第二分冊・医師の語り」として刊行された（ISBN：978-4990450427）。

<http://www.mers.jp/report/tyousa/final-report/no-2>参照。

をあらためて確認しておきたい。

さらに章をあらためて、「社会学的手続きで行われた聴き取り」の声を、その多声のままに交唱の響きを失わず、時間を越えて手渡すために必要な補助線として、文学的想像力を取り入れることの可能性を考える。文学的想像力は、(おそらく)社会学の想像力に比して人の身体的経験と言葉が密接なのではないか、という着想からの試みである。

1.2. いま、「医師の物語」を繙くことの意義

鷹田佳典(2019)は、「医師の物語については、患者の物語を抑圧・否認・無効化するものとして批判の対象にされる以外、十分に議論されることはなかったように思われる(p.13)」と、医師の語りの従前の位置づけを総括する。次稿で予定している分析対象テキストは、まさにそのような「医師の物語」からの脱却を期待して社会学研究者たちが行った聴き取り調査の、いわゆる「逐語録」が元になっている。その際、少なからぬ医師たちは、聴き取り調査そのものへの疑念を表明し身構え、語り手のリクルートは初手から順調ではなかった。語り手になることを躊躇った医師の多くは、上記の鷹田の見立てと同様の経験をしたり、そのような視線にさらされてきたのではないか。当時聴き手となった社会学研究者たちは、「そういった既存のマスターナラティブに回収されえない多様な物語(鷹田, 前掲論文, p.13)」に出会うための聴き取りの要請であることをあらためて医師側に説明し、その方法として対話的構築主義の立場に立った社会的インタビューを提案したのである。

現実には、聴き取り調査が対話として成立するまでにはかなりの困難を伴った。高度専門職である専門医を語り手とした場合に、聴き手との相互性が織りなすダイナミズムが創造性に富むものになるかどうかは、何よりもまず聴き手の側が、聴き手自身の物語を moral な次元³⁾で自己参照し、捉えなおすことに自覚的である必要があるが、これはもはや手続きや知識・技法の域を越える。その自覚や準備がないまま行われる聴き取りが対話にまで至ることは難しく、ともすれば肝心の医師が深く内包している suffering や moral injury (鷹田, 2021)⁴⁾ を感知できずに進めてしまうことになる。無自覚な問いかけは、話の核心に接近するたびに moral injury や suffering を回避する形でやりとりが展開したり、沈黙やオフレコといった形で音声データの底に語りや呑み込まれることにもなる。

3) 鷹田(2019)は、医師の語りを聞くことの重要性を、Kleinman, A. や Frank, A. を参照しつつ示している。その中で、moral を「単に人間の内面や善悪の基準を意味するものではなく、人間の『生(life)』のより根源的な位相に関わるものとして(p.15)」、Kleinman, A. の著作群より訳出解題している。

4) 鷹田(2021)は、患者を前にして医療者が感じる苦痛、不条理、無力感に moral injury 概念を当て、さらに医療人類学から suffering 概念を導入することで、批判にさらされる医療専門職の苦悩を道徳的次元で議論することを提案する。この概念枠組みの変更により、医師たちの臨床現場での懊悩を「解決すべき課題として位置づけるのではなく、『創造性』の契機を内包した状態として論じることが出来る(p.136)」という。

1.3. 声の拾い方：「聴き取りデータ」のエクリチュール

1.3.1. インタビューデータの記録：標準的な手続き

聴き取り現場でのこの困難に加え、保存した対話の音声をもどのように記録として定着させ公開するのか、という問題もあった。つまり、声の拾い方と書き方（エクリチュール）、伝え方の困難である。

一般的なライフストーリーの場合、聴き取り調査音声の後処理は、手続きに則って行われる。まず、すべての対話（＝語られた音声と認知可能な沈黙のすべて）は採録され、逐語レベルで書き起こす。その際、重なる声は分かち書きにせざるを得ないし（紙に文字列を上から重ねても、真っ黒になって読めないだけである）、沈黙や躊躇い・言い淀みをどのように掬い取るか／気づかず通り過ぎるかも、文字や記号に起こす者の恣意性に委ねざるを得ない。その後は、この文字テキストをベースとしたカテゴリー分析のスタイルを取って調査結果を公開するのが大方であろう。この一連の手続きから類推できるように、語り手と聴き手の交唱も、話し手の淀みや躊躇いを含むモノログも、さらには沈黙も含めて、すべてを了解可能な（＝つまり、意味のある言葉の連なりとして、あとから目を通して意味が理解できるような）日本語に落とし込んでいくことが、基本的に聴き手の側によって成される。この作業が手続きとして標準である限り、どうあっても話し手と聴き手は客体と主体に分かれざるを得ない。

1.3.2. 隘路を切り開く（1）：エクリチュール・フェミニンの採用可能性

語りをどのように記述するのかということは、手続きのレベルを超えて悩ましい。この点については「エクリチュール・フェミニン」の受容の問題として、フェミニズムからの指摘を参照することも可能だ（横田祐美子，2021）。

「女性的に書く」とは規定や断定を廃した仕方で、すなわちあるものを意味の一義性に還元することを拒むことで、「……は……である」という男根ロゴス中心主義的なエクリチュールを解体しながら書くこととなるだろう。イリガライにとって「女性的に書くとは……である」というふうに一概には説明しえない以上、読者はテキストの暗礁のなかに注意深く進んでいくことでしか彼女のエクリチュールを理解することができず、その身振りを模倣することもできない。だが、それは何も女性的なエクリチュールがまったくもって非合理的であり、感情的な言葉のざわめきであるからではない。 (p. 95)

エクリチュール・フェミニンは、書く対象と自身の間に距離をとろうとしない。したがって「～について」定義をしたり、筋だった理を組み立てようともしない。それは、たいていの研究者がアカデミックライティングとして訓練され馴染んできた、客観的・合理的（に見える）書きぶり——社会科学が装う準（quasi）科学的な文体と構成を、ルールごと越えてしまうような何かだ。それは時に自己言及的であり、あるいは別の時にはお互いの発話の一部に感応してひたすら逸れて横滑りで流れていく。

1.3.3. 隘路を切り開く（2）：準科学的枠組みから外れる社会的試み

考えてみると、そもそも社会的聴き取りの場面で繰り上げられる対話は、もともとそ

うものではなかったのか。特に対話的構築主義の立場をとる場合ならなおのこと、話し始めてみないと具体的にどういう話題が展開するかもわからないし、どのように推移するかも、いつまでその話が續くのかもわからない。そのことは、何よりもインタビュアーとして参加する聴き手が一番よく知っている。録音した音声データを文字に変換する作業を黙々と手作業で行う時、全てをテキスト変換することなど不可能なことは、作業している本人がよく知っている。一方で、声を拾い文字化する過程で過剰な変換を行っていることも知っている。沈黙でさえ、「沈黙（〇〇秒）」という書き込みになるのだから。その音声上の空白が熟考のための沈黙なのか、エラーなのか、逡巡なのか、聴き手への抗議なのか、正確なところは誰にもわからない（=いかようにも解釈できる）ことも知っている。知りながら「（沈黙）」と記す。知っていて「逐語録」を作り、意味のまとまり毎にパラグラフに仕上げる。読み手が迷わないように小見出しも付ける。

ところが、ここまでして丹念に作り上げたテキスト群が、読み物として魅力を發揮できないことはままある。聴き取った内容に魅力がないのではない。テキストが無機質すぎて読み通せないのだ。パラグラフにまとめ、小見出しを付け、タイトルをつけても、何の話なのか読み手の心には入り込んでこない。

一方で、モノグラフとして読み継がれる聴き取り調査記録・著作があることもまた事実である。時代を経て読み継がれる名著といわれるモノグラフ群に共通するのは、準科学的な手続きに拘泥せず、文学とのあわいのような記述や構成を採用しているところである。たとえば、冒頭に引用した五所純子（2021）の著作は、薬物依存の若い女性とその経験を五所を相手に語る一対一の聴き取り調査に基づいたものだが、冒頭、「インタビュアー」と称している五所が、読み進めるにつれてその自称すら消えてしまい、双方の言葉が入り乱れ、重なり、誰が何を言ったのか混然としてくるだけでなく、話し手・聴き手双方が「言わなかったこと」すら、随所で語られ始める。（もちろん、「言わなかったこと」は存在しなかったわけではない。）この書法については、五所本人が朝日新聞の取材において、以下のように述べている：

人間の語りには本来、整合性がない。でも、無理やり理路を作って書くことはしなかった。

そのままは語れない。だとしたら聞き手がどう語り直すのか。

(<https://book.asahi.com/article/14390153>)

作家・中村佑子は、雑誌 VOGUE のオンライン書評で、五所の同じ著作について、その書きぶりを以下のように評価している：

著者は相手が言葉にしたことだけでなく、言葉にできなかったであろうことも多分に想像を絡めて、書きとってゆく。帯には〈ルポ+文学〉とある。なるほど。第1章こそ著者の姿が「インタビュアー」として現れるが、それ以降の章では、どれが少女から聞いた話で、

どこが著者の想像による場面の書き取りで、何が著者自身のこの世への怨念なのか渾然一体となり、それはむしろどちらでも良いのではないかとでも言うべき強度でもってうねるように、出口なしの少女たちを描ききってゆく。

(<https://www.vogue.co.jp/change/article/vogue-book-club-kusuri-wo-ku-onnatachi>)

エクリチュール・フェミニンが目指すところを实践した一例ではないだろうか。

1.4. 社会学的想像力と文学的想像力

社会学的聴き取りは、社会調査の一部である。ゆえにノンフィクションであるだけでなく、社会調査の倫理に抵触する書き方ができない。「いかに書くか」というのは、声を伝えるためには根幹の問題なのだが、社会学的な（準科学的な）記述ルールに忠実に書く、社会調査の倫理を遵守して書く、となれば、読み手の想像を喚起したり内的共感を呼び起こすようなテキストを作ることはほぼ不可能となる。そしてこのように「正しく作られた」テキストが読み手の想像力を喚起することは、きわめて難しい。

一方で、読み継がれるモノグラフのほうは、結果として文学作品としても評価されることにもなる⁵⁾。この点を考えるとき、準科学的な社会学的記述の限界を、文学的記述に寄せて評価し、二次分析を試みることで越境できないかと考えるのである。言い換えるならば、文学的想像力の力を借りて社会学的想像力を喚起するということになるだろうか⁶⁾。

2. 記憶と記録を巡る社会学と人文学：

「医師の語り（2009）」テキスト解読のための補助線

2.1. 個人の物語と集合的記憶

有末賢（2018）が示唆するように、ライフヒストリー／ライフストーリー実践では、個人の語りと記憶、聴き手と語り手の相互作用と語り手の記憶との関係は肝要である。なかでも論点となるのは、個人の記憶と社会的記憶・集合的記憶の関係の捉え方であろう。

近年、社会学のみならず歴史学や人類学などでも、改めて記憶にまつわる諸論が再検討される傾向がある。災禍の続く昨今の世情が、災害や戦争の記憶の共有と忘却、継承の困難さや語りにくさを改めて問う機会となったのだろうか。さらに、これらの体験継承にまつわる当事者性の問題、すなわち「誰ならそれを語る資格があるのか」という問題も避けて通ることはできない。いずれの論点も、筆者が次稿で取り組む「医師の語り（2009）」の読解作業には必要な補助線である。

個人の記憶が集合的記憶やそれを醸成する「場」、そしてその「場」を左右する環境と関係して惹起し、さらに経験していない出来事の記憶もそこに含まれるのであれば（金瑛，2012）、

5) 嚆矢となった日本のモノグラフは、やはり佐藤郁也（1984）「暴走族のエスノグラフィー：モードの反乱と文化の呪縛」（新曜社）だろう。

6) 石牟礼道子の「苦界浄土」は、圧倒的な作品であることに疑いはないが、それがノンフィクションなのか小説なのか「浄瑠璃のようなもの（文庫版収録時の著者あとがきによる）」なのか、もはや拘ることもないと言えよう。

その「場」を共有していないいわば新参者の聴き手が関わることで、彼ら聴き手と語り手との相互作用はどのような語り手の記憶を呼び起こす／封印することになるのだろうか。語り手の記憶を新たに呼び起こすためには、インタビューや参与観察の場が、新参者の聴き手をも包有するような——いわば「場の延伸」のような時空の広がりを獲得しうるかどうか鍵となるのかもしれない。

2.2. 災厄の体験を継承すること

直野章子（2017）は、戦争体験を語り伝える営為を捉えるまなざしが、1990年代後半から2000年代に向けて変化してきたことを指摘する。「語り部」による戦争当事者体験の語りは「記憶の継承」と言われるようになり、同時に記憶研究・記憶論が学界を越えて広がってきたという。

当事者体験の伝達不可能性は、確かに戦争や災厄など、想像を超えてトラウマティックな状況に直面した人々にとっての実感であろう。聴き手にとっても、聴き取り調査の場で幾度として突きつけられる場面である。しかし、90年代以降は、体験の述べられ方そのものを、その後^{のち}の世情・世相によって遡及的に規定されるものと捉えるようになる。

だからこそ、「体験」ではなく「記憶」と言う概念が持ち出された。「記憶」と言う概念装置は、過去の出来事や体験が事後的な言語活動の所産であるという点を可視化してくれるからである。（直野，2017，p.44）

テキスト「医師の語り（2009）」に掲載している医師の物語は、1980年代末から90年代半ばの HIV 感染症治療経験の語りである。医師たちの当時の経験は、15～20年以上経った2003～05年になって改めて語られ、音声採録された。

実はこの間に、HIV 感染や AIDS 発症の社会的・医学的意味付けが180度変わってしまう治療研究の更新が生じていた。1996年に臨床治療上の分水嶺ともいべき「カクテル療法（※当時の名称）」が開発され、それ以前は「死」を意味した AIDS 発症が、以降は発症後も回復する予後が当然視されるまでになったのである⁷⁾。さらに言うなら、この変化は急激に生じ、1997年以降、HIV 感染症の予後が一瞬にして飛躍的に改善したことも加えておくべきだろう。この場合、現在あらためてテキストを再分析する立場としては、2003年に語られた1980年代末のエピソード記憶が、まさに事後的な言語活動の所産としての過去の出来事のふりかえりであることに充分留意しなければならない⁸⁾。「死の臨床」経験として末期 AIDS 患者のベッドサ

7) 朝日新聞記者の鍛冶信太郎は、1996年11月30日に大阪本社版で自らがこの「カクテル療法の劇的な治療効果」について取材し記事を書いた際、当初は東京本社デスクから勇み足として苦情を受けた経験を回顧している。鍛冶の『『死の病』に小さいが確実な希望の灯がともった』と言うキャプションにも表れる知見は、結果的に HIV 感染症に対するカクテル療法がその年のサイエンス誌に10大科学ニュースに選ばれ、タイム誌の「マン・オブ・ザ・イヤー」にも取り上げられたことで裏付けを得た形となり、そこで初めて東京本社から認められたと明かしている (<https://www.asahi.com/articles/ASL295171L29UBQU00M.html>)。

イドに向かった日々を「罹患・発症しても投薬治療によって普通の生活をおくることが出来る」時代に語りなおすとき、医師たちの当時の体験から何が省かれ、言い直され、あるいは新たに思い出されたのか。そしてそれらを HIV 感染症治療に関しては新参者にすぎない社会学研究者たちに伝えるとき、どのように提示され／隠されたのか。

直野章子は別稿で、原爆の被爆体験研究から得た洞察として、前代未聞の被災体験に付きまとう表象困難性についても述べている（直野，2020）。ひとの体験の伝達は言語に寄らざるを得ないにもかかわらず、常に不十分にしか語りえない。この理路をたどれば、「当事者にしかわからない」「言ってもわからない」という語り手の言葉に行きつくしかないのかもしれない。表象できない体験をどうやって他者に伝えるのか、という難儀に応える方法として、「体験の記憶」概念を当てはめることは、「誰がそれを語る資格があるのか」という問いを無効にすることが出来る点でも、ライフストーリーを読み込む補助線として有効であろう。

3. おわりに：観察記録の限界と文学的想像力援用の可能性

前章に続けよう。直野（2020）は、体験の表象不可能性について、それが記録媒体を更新すれば解決するようなものではないことにも触れ、改めて注意を喚起している。直野は、災禍の体験者が言語での表現不可能性を痛感して、「絵が描けたら」「あのときカメラがあったら」ともどかしがることも多いが、どのような媒体をもってしてもそれは情景の一部を切り取るのみであり、いかなる工夫を凝らしてもその表現に体感はず、どこまで行っても隔靴搔痒の感は免れ得ないだろう、と指摘する。この指摘に同意しつつ、特に準科学的な記述にならざるを得ない社会科学の領域であれば尚のことではないか、とも加えておきたい。

ここで、さまざまな文学や芸術作品における災禍の表現の可能性が登場する。

当人でさえも把握できない体験の記憶を形象化して他者と共有可能にするのは、極めて困難であると言わざるを得ない。しかし、方法がないわけではない。実際に、これまで多くの文学や芸術作品などが「新地獄」の記憶を表現してきた。（直野，2020，p. 21）

直野は、文学的想像力が読者に喚起するのは体験共有や共感の促しではなく、その「感知」であることに注目する。

三村尚央（2021）は人文学の立場から、同様に、記憶にまつわる①現在性、②再構築性と可塑性、③個別性と共同性、及び集合性、そして④媒介性の4点を議論の手がかりとして提示する（p. 12-13）。戦争や災厄体験当事者の当事者性とその直接の発話に拘る限り、具体的な出来事の記事でさえ時を経れば留めるのが難しくなるのは当然として、さらにそれが共同性・集合性を帯びる過程において負うことになる「…甘美な個人的ノスタルジアとは一線を画した、

8) たとえば、2000年代になってから HIV 感染症に罹患した患者や家族の語りを聴くときに、「1997年に間に合った／間に合わなかった〇〇（＝患者名）」という表現は頻繁に出てくる。それくらい急激に、「死に至る病」と認識されていた疾病が「適切な服薬により国民の平均余命まで普通に生きることができる病」に意味を変えたのである。

しばしば峻烈な政治性を伴う (p. 17)」意味付けに、聴き手も分析・解釈者も対峙せざるを得なくなる。「こうした領域では、記憶の『倫理』や『責任』も考察の対象となっている (p. 18)」という指摘は、ある種の社会学的聴き取り調査において、聴き手や分析者に対する挑戦的な補助線となるのかもしれない。

語り手が記憶に躓くとき、聴き手がその躓きに気づき共同出来るかどうかは大きい。躓きをそのままにして記憶の不在にしてはならない。躓きを躓きのまま置きつつも、その言い淀みや忘却をそのまま後の世代に継承するにあたり、文学の力は大きいのではないか。他者に起こったことや他者の経験を自分の記憶のように感じられる・自分の身の回りで起こったことのように感じられること、すなわち「たとえ事実とは異なるものであっても、それが『たしかに起こったことだ』と感じさせる記憶の「真正性 (本物らしさ) (p. 171)」を呼び起こすのは、文学的想像力の領域と考える。当然、このような試みは一筋縄ではいかず、三村 (前掲書) が2021年の SNS 上のプロジェクト、「ひろしまタイムライン」⁹⁾ の結末をふりかえりながら改めて喚起しているように、体験していない者が記憶を継承するには、伝える者—受け取る者双方に、知識、倫理、方法論など、多方面の困難が付きまとう。

以上を踏まえてもなお、社会科学領域の「物語」は、文学的想像力を補助線としながら再解釈・再分析する試みが必要ではないか、と考える。語られる貴重な経験は、後世に進んで読まれてこそ継承の役割を果たすことが出来る。稿を改め、実際に「医師の語り (2009)」を素材とした越境作用を試みてみたい。

付記

本研究は JSPS 科研費18K02055の助成を受けて行われた研究の一部である。

参考文献

- 五所純子 2021『薬を食う女たち』河出書房新社。
- 岸 政彦 2015「鉤括弧を外すこと：ポスト構築主義社会学の方法論のために」『現代思想』43-11, p. 188-207.
- 金 瑛 2012「集合的記憶概念の再考：アルヴァックスの再評価をめぐって」『フォーラム現代社会学』11, p. 3-14.
- 三村尚央 2021『記憶と人文学：忘却から身体・場所・もの語り、そして再構築へ』小島遊書房。
- 直野章子 2017『『被爆体験の継承』再考：記憶を導きとして』『歴史学研究』956, p. 44-52.
- 2020「当事者になる：体験の継承者から記憶の担い手へ」『生活協同組合研究』8, 18-25.
- 桜井 厚 2002「インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方」せりか書房。
- 鷹田佳典 2019「なぜ医師の物語は重要であるのか：二人の『アーサー』からの示唆」『質的心理学フォーラム』11, p. 13-22.
- 2021「誰が医療者を癒すのか—コロナ禍で浮き彫りになった医療者の suffering に着目して」『現代思想』49-2, p. 131-144.

9) NHK 広島放送局の企画で、「もし75年前に SNS があったら」という設定で実際1945年当時に書かれた日記や手記を基に現在の若者が Twitter を使って追体験を発表する、というものであったが、まさしく「事後的に指定されるリアリティ」と「当時の価値観や枠組みをあえて (但し文学としてではなく) 表現したりリアリティ」をめぐり、さまざまな議論を呼んだ。

横田祐美子 2020 「女性的に書くとはいかなる身振りか」『立命館言語文化研究』32-3, p. 87-98.
——— 2021 「メデューサはどこに消えたのか：『エクリチュール・フェミニン』と『ポストモダン』」
『現代思想』49-7, p. 195-202.

参考ウェブサイト

五所純子「『薬を食う女たち』インタビュー：実在する彼女、ルポか小説か」『朝日新聞デジタル・好書好日』
<https://book.asahi.com/article/14390153> (2021年7月7日掲載, 同9月19日最終閲覧)
鍛治信太郎「エイズ治療の劇的変化、90年代の『希望の灯』が現実に」『医療サイト朝日新聞アピタル・
連載：患者を生きる』<https://www.asahi.com/articles/ASL295171L29UBQU00M.html> (2018年2月10日
掲載, 2021年9月23日最終閲覧)
中村佑子「五所純子著『薬(クスリ)を食う女たち』人の話を聞きながら、自分の『声』を聞く」『VOGUE
BOOK CLUB 書評』<https://www.vogue.co.jp/change/article/vogue-book-club-kusuri-wo-ku-onnatachi> (2021
年8月19日掲載, 同9月19日最終閲覧)

(原稿受理日 2021年9月23日)